

全国盲ろう教育研究会 会報 第7号

2009. 5 発行
全国盲ろう教育研究会事務局

風薫る季節となりました。

新年度がスタートして早1か月が過ぎ、各地から子どもたちの学びや生活の様子が届いてきています。今年度も盲ろう教育に関わる実践や研究の報告、情報提供に努めていきたいと思っておりますので、ご協力の程、どうぞよろしくお願い致します。

◆全国盲ろう教育研究会 第7回定期総会・研究協議会開催のお知らせ

期日：2009年8月3日（月）・4日（火）

場所：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

内容：講演

実践報告（奈良ろう学校での教育実践、地域や家庭での生活など包括的な取り組みについて報告を予定しています）

ポスター発表

ワークショップ

◆全国盲ろう教育研究会 第6回定期総会・研究協議会報告

2008年8月17日（日）・18日（月）、神奈川県民ホール大会議室・小会議室を会場に全国盲ろう教育研究会 第6回定期総会・研究協議会を開催いたしました。

特別支援学校の教員、福祉施設指導員、盲ろう児童生徒の家族、研究者、医療関係者など87名（盲ろう児生・ボランティア・通訳者をのぞく）の方の参加がありました。



2本の実践報告に共感・感動し、大いに学び、8つのポスター発表に耳を傾けました。そして、ワークショップでは時間を惜しんで語り合うと共に貴重な見学や体験のひとつををもちました。

定期総会および研究協議会の様子を紙面にてご報告致します。

●全国盲ろう教育研究会 第6回定期総会報告

会長挨拶後、出席者数・委任状数を報告・確認した後、議事案件の審議に入りました。

- ・議案1. 2007年度事業報告
原案通り、了承されました。
- ・議案2. 2007年度会計報告
原案通り、了承されました。
- ・議案3. 2008年度事業計画
原案通り、了承されました。
- ・議案4. 2008年度予算
原案通り、了承されました。
- ・議案5. 規約の一部改定について
原案通り、了承されました。

●全国盲ろう教育研究会 第5回研究協議会報告

<8月17日>

◇実践報告Ⅰ「地域作業所わくわくわーく活動報告」

地域作業所 わくわくわーく

所長 岡田 恭子 氏
山本 真理 氏 貝嶋 敦子 氏 星野 勉 氏



(以下に、実践報告の概要を掲載いたします。尚、「盲ろう教育研究 第9巻」に本実践報告の記録を掲載する予定です。)

山本 真理 氏

1. 作業所ができるまでの主な活動(経過)

1999年「神奈川盲ろう者ゆりの会」が立ち上がったばかりの頃の役員会で、「神奈川には、盲ろう児がたくさんいる。今は、まだ学校に行っているけれど、卒業後に通える作業所をお母さんたちで作ってください。」とその当時の会長さんに言われ、衝撃でした。私たちが作るの？ まだ、うちの子は小学生でそんな将来のことを考えたこともなく、学校に行き、日々の生活のことだけでした。

それでも、1999年の秋にはゆりの会役員で横浜市の障害支援センターに盲ろう者が通える作業所がないのか、盲ろう者も通える作業所を自分たちで作るに

はどうしたらいいのかなど、作業所についてのことなどを聞きに行きました。

その後、ゆりね部（盲ろう児の家族の部会で、最初は保育部とっていましたが）で、将来、作業所を作るための勉強会をすることから始めようということになり、作業所や施設などの見学を続けていました。2001年から2003年までの2年間に7箇所余りのいろいろな作業所、施設など見学しました。

そして2004年3月21日、第1回盲ろう者も利用できる作業所設立準備委員会を立ち上げ、星野委員長のもと、2年間の準備期間に、500万円の自己資金を作り、作業所立ち上げに向けての活動が始まりました。以降立ち上げまで、2年間という予定から1年間を延ばすことになりましたが、3年間毎月1回（第1日曜日）全38回の準備委員会を開催し、資金集め、作業所の内容などを話し合い、2007年4月念願の盲ろう者も利用できる作業所わくわくわーくを設立するにいたりしました。

2007年4月1日開所式を無事迎えました。と同時に、わくわくわーく後援会を同時に立ち上げ、準備委員会からの資金を引き継ぎ、引き続き資金面でのバックアップが行える体制を取れるようにしています。ということで、わくわくわーくができるまでの経過を簡単にお話しました。

貝嶋 敦子 氏

2. わくわくわーくの概要

わくわくわーくは昨年の4月に横浜市に開所いたしました。横浜市の助成金をうけている地域作業所です。

運営は運営委員会方式です。委員には地域の町内会長、民生委員、盲学校の進路担当の先生、近隣の障害者施設の所長さん、また障害者支援センターや神奈川区役所福祉保健センター等の行政の職員、そして盲ろう当事者など20名おります。

通所者は13名、横浜市内から11名、神奈川県域から2名通所しています。スタッフは常勤1名、非常勤3名です。今まで非常勤2名でしたが8月より1名増えました。特徴と思えるのはボランティアの数が多くことだと思います。給食担当を含めると常時5～8人のボランティアが来てくれていますが、実は足りない時の方が多いんです。正しい情報を伝えようと思うと本当にたくさんの人の力が必要です。

通所日は火曜日から土曜日の週5日です。一日の流れは9：30をめぐりに出勤します。めぐりというのはやはり一人で通勤している方が多いので毎日同じ時間に通勤するのが難しいこともあるからです。でもほとんどの方は9時から9時半にはいらしてみなさんと話をしています。送迎は3名が作業所の車で送迎、1名が作業所の最寄の駅から徒歩送迎しています。その他1名が自家用車で通勤、8名は自力で通勤しています。

昼食は毎日ここにいる山本さんを中心に給食ボランティアが作ってくれます。2、3人でボランティアを含む15～20食分の食事を作ってくれています。野菜をたくさん使ったヘルシーな昼食です。上手にやりくりしてくれて、1食300円でみんなでおおいしくいただいています。ブログに毎日の食事メニューがのっているのでよかったらのぞいてみてください。

3. わくわくわーくの願い

わくわくわーくは、盲ろう者を中心とした障害のある人たちが地域の中で暮らし、活動する場です。そこに集うすべての人たちが生きることが互いに助け合い、それぞれの生き方を充実させて行く場だと思っています。作業所に通所している方々は目と耳の両方が不自由な盲ろう者がほとんどですが、盲ろうばかりでなく視覚、聴覚、どちらかが不自由な方も通所しています。つまり、わくわくわーくは目と耳両方、またはいずれかが不自由な方々が安心して通える場であるという大きな特徴があると思います。

関西地区ではいくつかの盲ろう者の作業所がありますが、首都圏では初めて作られた盲ろう者を中心とした作業所です。盲ろう、視覚障害、聴覚障害、重複障害の方を受け入れ、それぞれに関する専門性を培いたいと思っています。

わくわくわーくが大事にしたいこと、それは、「目と耳が不自由な人たちが、地域の中で自分らしさを発揮して生きること」です。

岡田 恭子 氏

4. わくわくわーくの活動紹介

実際の活動について、作業プログラムと生活プログラムに分けて話したいと思います。最初に作業プログラムについて報告します。

(作業の手順や活動の様子についてスライドで紹介)

- (1) エコポット
- (2) 裂き布ぞうり
- (3) 下請け作業
- (4) 点字名刺
- (5) 裂き布織り
- (6) わくわく農園
- (7) 自主活動

5. コミュニケーション支援

開所当初の願いでもありましたコミュニケーションができる人たちがいる作業所をつくりたいというみんなの強い気持ちがありますので、大切にしたいと思っています。

(スライドで紹介)

(1) 情報保障

情報保障には、「状況を伝えること」と「話しの内容を伝えること」の役割があります。通所者会議の時の写真です。様々なコミュニケーション手段を持っています。音声、接近手話、手書き、触手話など本当にいろいろ使っています。

(2) コミュニケーション方法

たくさんの方がいます。先天性盲ろう者の方に対してはオブジェクトキューやサイン等を使っています。音声、パソコンを使っての文字通訳、接近手話、指文字を使っている方もいます。

(3) PC LAN

毎日朝の会をしますが、どうしても通訳者が少ないことが多いので、パソコンを繋いで情報保障をしているところです。1台のパソコンからの文字情報を

3台のモニターに写し、それぞれに一番自分が見やすい文字サイズ等にして、情報を得ているところです。

(4) 盲ろう者同士のコミュニケーション

ボランティアさんはたくさん来ていただいているのですが、一人に一人がつくことは無理なので、当初は不満もあったのですが、物理的に無理なので、盲ろう者自身でコミュニケーションをとるようになってきています。

6. 視覚障がいに関する支援

(スライドで紹介)

(1) 環境設定の工夫

(2) 補助機器

星野 勉 氏

7. 先天性盲ろう者Dさんの活動

Dさんは先天性の盲ろう者です。昨年3月に盲学校を卒業し、わくわくわーくの開所と同時に入所しました。スタッフ・ボランティアは、Dさんが学校時代に培い身につけてきた生活、コミュニケーション等の力を就労の場である作業所で発揮し、新たな成長につなげるために試行錯誤を続けてきました。

具体的な作業は何ができるのか。Dさんは作業所で何をしたいのか。一日の流れをどう組み立てるのか。Dさんとコミュニケーションできるスタッフ・ボランティアを増やし、他の通所者さんとやりとりするにはどうすればいいのか。はじめて就労したDさんが作業所で働き、暮らすためには様々な課題があります。まだまだ、模索中・発展途上ですが、岡田所長・スタッフ・ボランティアの実践を報告いたします。

先ずは作業プログラム、つまり「働く」ことです。

- (1) 作業プログラム1 シュレッダー
- (2) 作業プログラム2 布を裂く
- (3) 作業プログラム3 ほこり取りはたき
- (4) 作業プログラム4 荷物運び
- (5) 作業プログラム5 わくわく農園
- (6) 生活1 生活プログラム 挨拶食事
- (7) 生活2 個別プログラム 学び
- (8) 生活3 個別プログラム 歩行

現在のDさんの一日は、先ほど紹介しましたが、この流れの中でDさんが意思決定する機会を多くし、生活と作業の両面で「Dさんの働く暮らし」を充実させて行くために、今後とも様々な工夫と努力をして行かなくてはならないと考えています。

学校と、進路先である作業所が引き継ぐべき内容は、単なる情報ではなく、盲ろう者本人の人生であると思います。先天性盲ろうの通所者一人ひとりが、自分のやりたいことに挑戦し、自分らしさを発揮できるように、学校・保護者・作業所など進路先が、共に連携して頑張っていきましょう。

以上で先天性盲ろう者Dさんの活動報告を終わります。

岡田 恭子 氏

8. まとめ

いろいろお話しさせていただきました、開所した当初は1年間何とか運営していけば、スムーズにいくと思っていましたが、課題があるんだなと思い知らされています。大きな課題と知っていることは、先天性盲ろう者の方の支援をどうするかということです。わくわくわーくでの体験を通し、「生きる」というのはずっと学んでいくということなんだと実感しています。その他にも、作業を増やしたい、販路を開拓したいとか、今は横浜市の特別な助成金で活動していますが、いずれ自立支援法の中での活動といったことも出てきます。ボランティアさんを増やすといったこともあります。

(— DVD 盲ろう者の思い — 視聴)

◇ポスターセッション

ポスターのテーマと発表者および概要は以下の通りです。

「盲ろう」であるDくんのやりとりの素地づくりを目指して	福島大学附属特別支援学校 星 視文
<p>Dくんは現在中学2年生である。私とDくんとの出会いは、私が前任校に赴任した5年前であり、以来小学3年生から6年までの4年間担任としてかわり続けてきた。</p> <p>小学部段階では、Dくんのかかわりの中で、相手のはたらきかけに対して耳を傾けたり、自分の意思を相手に伝えようとする姿勢“やりとりの素地”を育てることを目指してきた。その4年間のかかわりを紹介したい。</p>	

ハイスピード指文字！？ 弱視ろうY君の学校生活とコミュニケーション	静岡県立静岡視覚特別支援学校 今村 光宏
<p>盲学校（視覚特別支援学校）の重複学級に在籍するCHARGE症候群で弱視ろうの小学3年生Y君が、人工内耳が不具合を起こし全ろう状態になりながらも、指文字や手話の視覚コミュニケーションを駆使しながら過ごしてきた主に2年生から現在までの学校生活とコミュニケーションの様子等についてご紹介したい。</p>	

ろう学校における 盲ろう生に対する国語指導	奈良県立ろう学校中学部 中村淑子
<p>盲ろう生のO君を中学部で受け入れて2年目になる。視覚的には全盲であるが、聴覚は90dB前後と個別対応での音声は比較的良く入るため、音声、触手話（指文字）、点字を手段とするなど、残存機能を最大限に生かした指導を心がけて進めてきた。言葉の習得は身の回りの簡単な言葉にとどまっていることが多いため、国語の指導内容については生活に関連したものや小学校低学年程度の教材などを、実体験を通して理解したり、点字で読み取って触手話で意味を確認して読み深めたりするという方法で進めている。</p>	

Mくんの数学 ～そろばんの計算を通して～	埼玉県立大宮ろう学校 磯部 富士子
<p>そろばんの使い方をどのように学習すればよいのか、Mくんから学びながら、試行錯誤した経過をまとめた。</p>	

盲ろう生徒の進路指導	広島県立広島中央特別支援学校 高等部 赤松 弥生 小学部 三浦 憲一
<p>進学・就職等、高等部では、目前に迫る社会進出に対する取り組みが重要課題となります。高等部2年生となったA君に対しても、この課題に対して取り組みを進めている。</p> <p>本ポスターでは、本校の進路指導に対する取り組みの全般を報告するとともに、A君に対する取り組みや本人自身の進路に対する現段階の思いを報告する。</p>	

<p>盲ろうの子どもの保護者を対象とした 教師の専門性についての調査</p> <p>—ふうわとチャージの集いにおいて—</p>	<p>国立特別支援教育総合研究所 中澤 恵江 筑波大学特別支援教育研究センター</p> <p>星 祐子</p>
<p>盲ろうの子どもの保護者に対して、昨年度の「ふうわ（盲ろう児とその家族の会）夏の集い」および「CHARGEの集い」において、教師にいかなる専門性を求めているのかを中心にアンケート調査を実施した。その結果について報告し、今後の教員研修の在り方等について考えていきたい。</p>	

<p>Kの普段の生活が丸ごとわかるような サポートブック</p>	<p>「ふうわ（盲ろう児とその家族の会）」</p> <p>広重 真佐子</p>
<p>盲ろうであるKの日常の生活の様子ができるようなサポートブックを家族で作成し、活用を図った。日常の活動の様子や楽しみ、表情を映像を通して伝えることで、関わる方に「こんなこともできるんだ」「こういった楽しみがあるんだ」といった「普段のK」の姿を知っていただき、かかわりが豊かになることを目指している。</p>	

<p>盲ろう者福祉の現状と今後</p>	<p>社会福祉法人全国盲ろう者協会 庵 悟</p>
<p>①盲ろう者福祉の流れ ②盲ろう者福祉現況 ③社会福祉法人全国盲ろう者協会の事業内容 ④盲ろう者福祉の今後の課題 の4部構成です。</p> <p>日本の盲ろう者福祉の歴史の中で、社会福祉法人全国盲ろう者協会が取り組んできたことにふれながら、今の日本の盲ろう者福祉の現状と課題について、ご参加の皆さまと情報を共有し、今後の盲ろう者福祉の展望についていっしょに考え合いたいと思います。</p>	

<8月18日>

◇実践報告Ⅱ

「知的障がい養護学校における小学部から中学部への移行支援と
かかわりの拡がりについて」

福島県立西郷養護学校 加藤 敦 氏
福島大学附属養護学校 星 視文 氏
(前 福島県立西郷養護学校)



加藤 敦 氏

1. 西郷養護学校の概要について

(1) 学校の紹介

西郷養護学校は、福島県の中通り南部の栃木県との県境に位置し、学校からは那須連峰も見ることができます。

学校の向かいには森林公園という大きな公園もあり、周辺はたくさんの自然に囲まれています。4月にはたくさんの桜

が咲き、とてもきれいな桜並木沿いや広々した公園内を散歩したり、高等部の朝のマラソンコースとなったりしています。

(2) 児童生徒数、教員数、概要

本校の児童生徒数は小学部24名、中学部19名、高等部42名の計85名、職員数は53名と県内でも中規模の特別支援学校です。

本校は、知的障がいのある児童生徒を中心に、肢体不自由や聴覚障がいのある生徒、医療的ケア対象の児童生徒、そして盲ろうの生徒と、障がい種別を超えて様々な障がいのある子どもたちがともに学んでいます。これは、地域の中で育てたいという保護者の方々の願いもあるのではないかと思います。

2. Dについて

(1) 障がいの状況について

【視覚、聴覚について】

Dは、中学2年男子で、視覚、聴覚に障がいを併せ有する「盲ろう」の生徒です。

視覚については、障がいの原因は不明で、視力測定は不能となっています。ただし、行動観察によれば、光覚は認められ、光の方向も分かります。また室内でも2、3メートル離れた人の動きを追ったり、物や机、すれ違う人をよけたりする様子が見られます。教室の白い床に落ちている自分の欲しい黒い筒をずっと手を伸ばして取る様子も何度も見られ、特定の条件下では視力を頼りに行動している姿も見られますが、ほしいものを探す時など手の感覚に集中して手探りで探したり、触った感覚やにおいなどで物を確認します。物に目を近づけて見ようとする様子は見られません。

聴覚についても、障がいの原因は不明で、昨年度数回、脳波による検査を実施しましたが、本人が睡眠状態になることができず、測定できませんでした。ただ、聴覚については日常生活場面で、聴覚を活用する様子は見られず、例えば、耳元で、大きな音がしても驚くなどの反応は見られません。

【コミュニケーション手段について】

現在のDのコミュニケーション手段は、手話をベースにしたオリジナルの「触手話」を使っています。

D自身が自分から発信できる手話は 20個程度

Dが受信できる手話は 40～50個程度

手話のほかにオブジェクトキュー（30個程度）を合わせて使っています。

その他に、定着していない手話についてもその場の状況を伝えるために使いながら、実際に使っていく中で状況と手話の意味の一致を図りDとのやりとりが広がっていければと思っています。

（2）現在の実態

○本校での教育課程とDの興味関心について

Dの中学部での教育課程は自立活動を主とした教育課程です。日常生活の指導と自立活動で構成されています。

自立活動の時間の中で、中学部の作業学習や、体育、学部、学年の合同の授業に参加しながら、学部の友だちや教師とのかかわりを深めたり、さまざまな活動に取り組んだりしています。

Dはいろいろな素材のものに対しての興味を持ち、それらを手で触った感触や唇にあてた感触で確かめたり、自分なりに他のものと組み合わせたりして、Dなりの「自作のおもちゃ」を作り上げ、それらを使いながら重力や張力、耐久性など遊びを通して様々な実験をしています。

自立活動の時間の中で、Dの興味関心に寄り添いながら活動する中でさまざまなやりとりを深めたり、Dの探索活動や物事の因果関係を確認するような活動とともに取り組んでいます。また、教師が準備した題材を使った活動にも誘ったりしながら授業を構成しています。

○日常生活の中での様子

日常生活においては、着替えや排せつの手順、食事の準備や片付け、食事などについては、教師の少しの支援でほぼ自力で取り組むことができる場面が増えてきています。

移動については歩行については問題なく、校舎内や学校周辺については、これまでの探索行動からおおよその場所を把握しており、目的に向かって一人でも移動することができます。ただし、慎重な面も見られるものの危険回避は難しいです。

3. 小学部から中学部への移行支援について

星 視文 氏

(1) Dが中学部へ進学し、環境が新しくなるということを理解し、受け入れることができるための支援

小学部3年から6年までの4年間を担当した星です。

私からは、Dの中学部進学に向けての支援、Dが中学部進学ということをどのように理解し受け入れていくか、大きな環境の変化に対する支援をどのように行ってきたのかについて報告します。

小学部から中学部へ進学する中で、ある日突然、いつも一緒にいた先生がいなくなり、新しい先生になる、教室が今までと違うなど、いろいろな変化に戸惑うこと、不安なこと、怒りたくなることが沢山あると思います。そうした環境の変化を少しでも自分で納得できて、状況を理解していくためにはどうしたらいいかということで、いろいろ考えました。考えるにあたっては、D自身が「自分は中学部へ進学するんだ、4月になったら新しい環境で勉強するんだ」ということを理解したり、新しい環境に期待感が持てるように中学部進級に対する支援、進路指導という視点を大事にしました。そのために、じっくりと必要な時間をかけて、D自身への支援を行いました。



盲ろうという情報が限られた世界で生活しているDにとって、環境が変わること、別れや出会いがあるということ、自分が進学するという事など、それら一つ一つを一緒に確認することは、大切なことだと考えました。

○教室の移動

まずは、教室の場所および教室環境の移動についてです。Dにとって「教室」は、学校生活のほとんどの時間を過ごす場所であり、校舎内において基点となるところ、そして、自分が一番安心でき、落ち着くことのできる場所でありました。また、自分の大切なものが置いてあり、どこに何があるのかを把握している自分の空間といった場所だと思います。

その教室が移動するという事は、Dにとっては、世界が一変してしまうようなとても大きな意味を持っていますので、教室の引っ越しをDと一緒にすることで、教室の移動を知らせようと考えました。教室でDが使っている数々の教材・教具等を一つ一つ小学部の教室から中学部で使用する教室へと移動していきました。荷物を持って廊下を移動していく中で、中学部の教員とも接する機会を設けるようにしていきました。

○担任の先生とのお別れ

また、担任が替わるということを理解させるために、「星以外の先生が周りにはいて、Dと関わっていること」を給食の時間をはじめとして、いろいろな場面で意識化させることを心がけました。そして、担任のネームサインとなっていた腕時計にバイバイをして、一緒に袋にしまうということで、お別れを理解させることをしました。わたしにとってもじーんと目頭が熱くなる儀式でし

た。

さらに、卒業式という区切りの中で、小学部はおしまい、卒業するんだということを押ませよう、しかもD自身が今まで蓄えてきた力を発揮する場でもあって欲しいと考えました。Dの今現在の様子と課題を踏まえて、保護者の方や関わってきている教員をはじめとして多くの方の意見も参考にしながら、Dが自分の席からロープを伝って前へ出て行き、そこで卒業証書を受けるといったことをしました。立派なDの姿でした。

加藤 敦 氏

(2) 小学部から中学部への教師間の引き継ぎ

○チームアプローチの視点での支援体制

○教師間（担任間）の引き継ぎについて

○小学部から中学部への教員の移動

○中学部に入学後のDの様子

4月当初、Dは、登校時に小学部の以前の教室の方へ行き、中へ入ってみるけれど、自分のものがないことを確かめるとすぐに出て、中学部の新しい教室へ行くといった行動をとっていました。変化に対して怒ったりすることはなく、確かめている様子がみられました。「引越しをしたけれど、もしかしたら、明日はまた元に戻っているかも・・・」といった心境だったのかもしれませんが。毎日ではないけれど、週が変わったときなどは登校すると確かめに行く姿が見られました。

年度末に引越しを教師と一緒にいったことは、学部が変わって、教室移動になっても、学校の中で新しい自分の教室はここにあるんだということを確認することができ、さらに、自分で引越しを行ったからこそ、教室の場所が変わったということを受け入れることができたのではないかと思います。

したがって、新学期になってすぐに、新しい担任と新しい自分の教室を基点として校舎内の探索行動を行いながら頭の中に新しい自分の校舎地図をつくるための探索行動をはじめることができたのではないかと考えています。Dにとっての教室の意味を考えると、「引越し」を行うことはとても重要な移行における支援のひとつだったと思われます。

担任が替わったことに対してですが、新担任との行動についてはあまり抵抗は見られず、小学部のときの担任のネームサインを探す様子は見られませんでした。新しい担任とこれまでDが行ってきたこと、すでに一度Dの中で完結した遊びや行動、場所の探索などを一から新しい担任である私と試す様子が見られました。

教師間の引き継ぎをうけて、これまでDがおこなってきた手話のやりとりや交渉、かわり方の基本が同じことで、自分の思いが伝わっているという安心感を持ってもらうように心がけましたが、「僕の伝えていることは先生はわかってきているんだ」、「人が変わっても、同じことができるんだ」という安心感をもてたように思います。

小学部段階では担任（星先生）と一対一のコミュニケーションを深めてきた

Dにとって担任が変わるということは、いろいろなものと自分をつなぐ大きな支えを失うことになります。しかし、これまでまずはじっくりと一対一のかかわりを深め、その中で双方向のコミュニケーションが深まり、さらに小学部後半から徐々に複数の人とのかかわりへと意識を向けてきたことから、「コミュニケーションの基本が同じ」という安心感をベースに新しい人（担任）とでも同じようにやりとりができるというDの成長へつながったのではないかと思います。

○入学式の様子について

中学部初めての登校は、入学式の日でした。

母親と登校したDは、私のネームサインを触りながら確認すると一緒に中学部玄関から校舎内に入り、新しい教室へ入り、コーナーのおもちゃが置いてあるスペースへ行き、お気に入りのおもちゃを手にとって遊び始めました。しばらくした後、ふと確認に行くように教師の手を引いて教室から出ると小学部の教室の方へ行き以前の教室へ入って行きました。しかし、そこが新しい学級になっていることをすぐに感じると教室から出て、再び中学部の新しい教室へ教師と一緒に戻り、新しい自分の教室で再び遊び始めました。

入学式では入学許可の場面で卒業式の時に行ったように自分の席からロープを伝って前に出て行き、友達と一緒に並んで入学許可を受けました。

4. 中学部でのかかわりについて～いろいろな人とのかかわりの広がり～

まず、中学部に入学して個別の教育支援計画を作成する上で、D自身の思い、保護者の方の願い、教師の願いをそれぞれ挙げながら、「D君の生活が豊かになるために必要なこと」とは何かを考えました。

①コミュニケーション手段の拡大と定着

②やりとりを通して自己調整力を高める

③興味関心の拡大、人間関係の拡大

といった3つの点が挙げられました。

これらをD君の中学部での学習や生活、支援の中心におき、D君の長期目標等を設定しています。

○小学部での一対一のかかわりからより多くの人とのかかわりへ

○教師間の連携と協力

○状況を理解して納得することから次へつながること

○気持ちに通じるということの喜び

○因果関係の理解

○Dとのかかわりを通して学んだこと

5. 高等部進学へ向けての引き継ぎ

現在中学2年生のDは、丁度3年間の中学部生活の半分にきました。そして来年は中学3年生になりいよいよ受験生となります。今後の進路について次は中学部がDを送り出す立場としての支援をしていくことになります。

まずは、高等部進学への本人と保護者の意思表示を受け、高等部入試に向けて早い段階で、高等部へ進学希望の意思表示をして、その上で高等部との連携をとっていくことが必要になります。

来年度、Dが体験してきた「進学」のイメージをベースにしながら、中学部から高等部への進学の学習、そして移行支援を行っていければ、D自身の進路の学習、進路選択へと結びついていくのではなかと思います。

また、それに向けての校内支援の体制を、学級から学部へ、学部から学部間へ、そして学校全体へと広げていければと思います。

6. 最後に

Dの小学部から中学部への移行支援から始まり、現在の中学部での日々のDとのかかわりから、私自身も多くのことを考え、そして悩みながら日々、Dとともに学んでいます。

また、Dのような盲ろうの子どもとのかかわりが、他の子どもたちとのかかわりにおいても基本となっていくことがたくさんあることを実感します。

本校では、Dの小学部から中学部への移行支援から、Dだけではなく、その子どもに応じた支援や引き継ぎを行う必要があるということで、昨年度も同じように約半年間をかけて、小学部6年生の学部間の情報交換をする機会や、中学部教師による授業参観、小学部6年生の中学部一日体験を行ってきました。そして今後、中学部から高等部への引き継ぎ体制についても、Dのように特に時間をかけてじっくりと行うことが必要な生徒について、こういった形で行っていくことがよいのかを検討していければと思います。

ご静聴、ありがとうございました。

◇ワークショップ報告

次の3グループに分かれ、見学・体験をしたり、協議を行ったりしました。

①地域作業所わくわくわーく見学

②情報機器の説明と体験

- ・携帯電話を活用した体表点字システム
- ・ブレイルメモ

③盲ろう児童生徒を初めて担当したあなたへ

●「地域作業所わくわくわーく」見学

前日に実践報告のあった「わくわくわーく」を実際に見学しました。日本大通り駅からみなとみらい線で反町駅まで移動し、そこから8分程度歩くと、色彩鮮やかな1階が作業着屋さんになっているビルがあり、その3階が「地域

作業所わくわくわーく」です。

所内の説明のあと、通所者の皆さんと話したり、作業の様子を見学させていただいたりしました。「通所者の方々が利用しやすいように」と行った視点での環境づくりには、学ぶものがたくさんありました。

また、実践報告のあった先天性盲ろう者の方の課題を見据えた活動内容とその活動をつくり出している教材教具の数々はとても参考になり、改めて「生きることは学ぶこと」を実感したひとときでもありました。

通所者の方々の表情が輝いているのがとても印象的な訪問となりました。

「地域作業所 わくわくわーく」のお問い合わせと情報は…。

- Eメールアドレス : wakuwakuwa-ku@nifty.com
- ホームページ : <http://homepage3.nifty.com/wakuwakuwa-ku/>
- ブログ : <http://happy.ap.teacup.com/wakuwakuwa-ku/>

●情報機器の説明と体験

- ・携帯電話を活用した体表点字システム
- ・ブレイルメモ

2グループに分かれ、それぞれの機器の説明と体験を行いました。

・携帯電話を活用した体表点字システム

システム開発に携わってきた長谷川貞夫氏の体表点字システムの説明をお聞きした後、体表点字装置を用いて体験をしてみました。2個の振動子のブルブルの感覚を50音や単語として読み取れた時などは歓声があがっていました。

□体表点字とは・・・

体表点字は、その情報が電波などの信号によって体の表面に積極的に伝わってきます。従来は、6個の振動子を体表上に装着していましたが、新たに2個の振動子のみでできる方式も開発しました。体表点字装置ビーブルは、単体でもコンピューターと接続しても使用可能な体表点字の為の装置で、ビーブルを用いると、盲ろう者同士で携帯電話による会話ができます。携帯電話のボタンを点字にみたてて入力することにより発言できます。相手および自分の発言はビーブルを用いて体表点字にて確認できます。(説明書より引用)



・ブレイルメモ

東京大学先端科学技術研究センターの大河内直之氏から盲ろう児者の情報および連絡手段の現状について、PC、携帯電話、点字PDA（携帯情報端末）「ブレイルメモ」「ブレイルセンス」の機能とその活用について説明をお聞きした後、「ブレイルメモ」「ブレイルセンス」を中心に実際に体験しました。



ブレイルメモ

●初めて盲ろう児生を担当したあなたへ

担当しているお子さんの状況により、主に3つの課題について確認し、情報・意見交換や中澤より助言を行いました。

①チャージ症候群のお子さんの排泄、摂食について

チャージ症候群のお子さんは排尿のコントロールが難しいので、時間をかけてゆっくり取り組んで欲しいことが指摘されました。摂食については、主治医や専門医と十分に相談して欲しいこと、練習開始のポイントとして、自分の唾液が飲み込めるようになること、これが可能になった場合、主治医の許可を得て、ガーゼに包んで丸のみしないようにした飴をなめるといった工夫もできるので、医療機関と連携して欲しいといった話が出されました。

②盲ろう児のコミュニケーションについて

身振りや手話は、盲ろう児の身体に必ず触れるような工夫をして欲しいこと、手話は基本的に見るサインなので、盲ろう児の場合は自分の身体に触れることで理解できること、たとえば、「行く」は手の平の上で人差し指を動かす、「歌う」は指先を頬に当てる等の工夫が大切であることが指摘されました。

運動障害のある盲ろう児の場合は、振動（ボディソニック等）・温度変化（お湯を入れたペットボトルに触る）等の活用があげられること、良い香りのするローションを使ったマッサージの実践が紹介されました。また、幼児はぜひお母さんの膝に乗せてスキンシップして欲しいことが指摘されました。

③点字による国語学習について

「正しい」点字のさわり方等の指導を中心に進めるべきか、さわり方よりもまずは興味のある内容について点字を読み書きする楽しさを中心にするべきか、指導方針に迷っている状況が出されました。当該生徒の状況から考えると、本人にとって意味があること、意欲があることが点字を学ぶ原動力になるため、後者を中心にしながら、さわり方について時期を見て指導を行うことが適切ではないかという結論に至りました。

最後に『盲ろう児とかかわるときの基本原則』の資料が紹介され、いずれの活動も開始と終了をはっきりさせること、準備や片付けも盲ろう児と一緒に取り組むことで、意味のある有意義な活動になっていくことが話されました。お互いの課題を学びあい、関わりのヒントをたくさん見つけることができた話し合いでした。

【文責：中澤 恵江、西村 晴美】

◇先天性盲ろう児・者プログラム

参加者…盲ろう児者	1日目	7名	2日目	6名
ボランティア	1日目	10名	2日目	9名

(1) 概要

以下の活動を行いました。

1日目 シーバス乗船、散歩

2日目 「ふれーゆ」(温水プール)、スカイウォーク

(2) 活動報告

一日目は、会場から山下公園のシーバス乗り場まで歩き、そこからシーバスに乗船しました。心地よい潮風と水上を進むシーバスの揺れを感じながら横浜駅東口までの小さな旅をそれぞれに楽しみました。帰りは、雨の中を帰路を急ぎました。

二日目は、横浜市高齢者保養施設「ふれーゆ」(温水プール)と、ベイブリッジを歩くスカイウォークに行きました。

さすが夏休みの横浜の道は混雑し、事故が重なっての渋滞となりましたが、車内でも賑やかな子供たち。

25メートルの競泳プール、ウォーキングを楽しむ流れるプール、ぶくぶく泡がおもしろいジャグジープールなど、いくつものプールを楽しむことができます。「水が大好き、泳ぐの大好き」な子供たちは、ボランティアさんと、友だち同士でそれぞれに楽しんでいました。体調が心配された子供もいましたが、水着に着替え、プールの匂いがすると、ニンマリ。

午後は横浜港を横断する横浜ベイブリッジの見学です。エレベーターであがり、ベイブリッジの真ん中まで歩くことができます。ベイブリッジの上は高速道路が走り、スカイウォークの隣には一般道路を走る車がよく見えます。窓に広がる港と、振動と、頬に当たる海風と、それまで静かだったMちゃんが大きな声で笑い、抱っこをされながら何度も何度も体を前後に揺すりながら、ジャンプをしているようでした。気持ちのいいひと時でした。

暑い夏の日、子供たちと共に過ごした熱い一日でした。

【文責：松本 末男、三科 聡子】

●運営委員会・事務局より

第6回定期総会・研究協議会にご参加の皆様、お忙しい中、ありがとうございました。ボランティアの方々をはじめとしまして、多くの方々には、多大なるご協力をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。皆様からいただいたアンケートでは、暖かなねぎらいや励ましのことばとともに、今後の運営に対しても貴重なご意見をいただくことができました。今後もより充実した研究協議会となるよう努めてまいりますので、今後ともご協力のほど、宜しく願いいたします。

●会費納入のお知らせ

2009年度会費(年2000円)納入をお願いいたします。

・2008年度分までの会費納入がお済みでない方は、併せての納入をお願い

いたします。

・納入状況は、宛名ラベルに記載しています。ラベル印刷後に納入された場合など、行き違いがありましたらご容赦ください。

・年度会費納入時期は、当年度の4月1日～6月30日となっておりますので、ご協力の程、お願いいたします。

◇振込・振替先（みずほ銀行、またはゆうちょ銀行をご利用ください）

みずほ銀行 本郷支店

口座番号 普通預金 8062806

口座名義 全国盲ろう教育研究会会計 柴崎 美穂

ゆうちょ銀行（払込取扱票を同封いたしました）

口座番号 00100-6-484136

加入者名 全国盲ろう教育研究会

前回の定期総会で規約第3条第2項が以下の通りに改定されましたので、会費の納入についてご確認の程、お願い致します。

（封筒の宛名の右下に納入年度について記載してあります。）

第3章 会員

（退会）

第6条

2. 連続して3年以上にわたって会費を納入しなかった者は、退会を申し出たものと見なす。

全国盲ろう教育研究会 第7回定期総会・研究協議会のお知らせ

日程：2009年8月3日（月）・4日（火）

場所：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

ポスターの発表、募集中です！！